

商業高校におけるケースメソッド教育導入に関する実践報告

—ディスカッションを通し生きる力・実践力を身につける—

香川県立高松商業高等学校教諭 松下 奈央

1. はじめに

本校は明治33年(1900年)に創立し、今年、西暦2010年には創立110年を迎える伝統校である。その特色は、何といっても一人一人の生き生きとした活動であり、勉学に部活動に資格取得に、それぞれの生徒が全国レベルでの高い成果を目指し競い合う中から、「就職も進学もできる高商」「部活動の高商」といった伝統が形づくられてきた。

現在、全日制課程では商業に関する学科(商業科・情報処理科)と外国語に関する学科(英語実務科)、定時制課程では商業に関する学科(商業科)があり、生徒総数920余名が在籍している。

ここでは、平成19年度から本校情報処理科が、生きる力・実践力を身に付けるため総合実践の授業で取り組んでいる『ケースメソッド教育』について紹介し、その実践方法や、今後の課題等について報告したい。

2. 商業高校における問題と問題意識の芽生え

現在、私が勤務している高松商業は全校生徒の8割が何らかの部活動に所属しており、その部活動のうち約6割が全国大会出場を果たしている文武両道を掲げる学校である。ここ数年、本校の保護者アンケートの結果によると「本校に何を期待していますか?」の問いに対し、上位(授業部活・生きる力・活用資格)は同じような結果となっている。

高校生活における部活動では、技術面だけではなく礼儀作法や目上の方に対する言葉遣いなど社会生活を行なう上で必要なことを身につけることができる。また、さまざまな商業科目を学ぶことで、商業に関する基礎的・基本的知識を取得することができる。このことは、早期段階からの職業観・勤労観を育てることができ、また、多くの商業に関する資格を取得することで勉強に対する成果を実感すること

ができる。さらに、目的を達成する力・忍耐力も育成され、取得した資格は就職や進学にも有利となる。

しかし現在、知識のみで応用力に乏しいと感じることがたびたびある。資格取得にしても生徒は資格取得が目標となり、合格後それら資格の知識をどのように活かせばよいのかがわからないまま、言葉のみ・解き方のみを学習しているケースが多い。そのため、問い方を変えた応用問題などに弱い。また、授業でも入試・検定に中心がおかれているのが現状で、生徒が自ら考え表現するような場も少なくなっている。知識を伝授するだけの一方通行の授業が多くなっているのである。生徒が自分自身で学ぶ意欲のもと、自分自身で考える力をつけるような授業を行なうことはできないだろうか。応用力や実践力を育成するための効果的な授業を行なう必要性を常々感じていた。

3. ケースメソッド教育との出会い

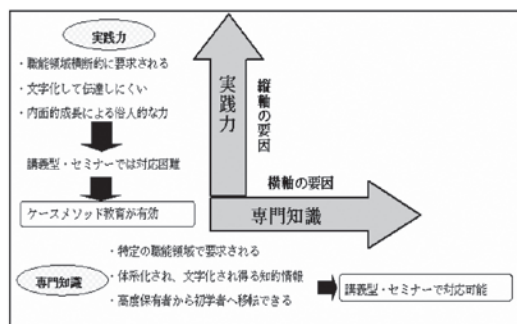
近年、大学ではケースメソッド教育というものが取り入れられている(主に大学院(ビジネススクール)で導入されている)。私自身が初めてこのケースメソッドの授業を受けた時、ただただ周囲の人の考え方、表現方法のすごさに圧倒され自分自身の意見を発言することができなかった。発言者は自分自身の考えをまとめ、それを周囲にいるすべての人にわかる言葉で話し、納得させるだけの理由も一緒に述べている方がほとんどだったからだ。また、ケースメソッド授業では授業前の事前学習が必要とされている。その事前学習の段階でいかに自分自身の主張をまとめ、何が問題なのかというケースを読み取る力も必要とされる。さらにその解決方法も本や過去の自分自身の体験をもとにして考えなければならない(私が受けた授業では、ほとんどが企業の第一線で活躍されている方だった)。授業終了後、発言された方に話を伺い更に驚いた。それは、企業では

ディーバート大会が行われ、そこで表現力や思考力を鍛えていること、さらに、部課でのディスカッションや管理職を前にしたプレゼンテーションでは、常に自分自身の考えを表現する力をつけておく必要性があるということを知った。このことは、企業が求める人材を考えるよい機会となった。

4. ケースメソッド教育とは何か

ケースメソッド教育は、ハーバード大学のロースクール（法科大学院）で行なわれていた、判例のもとに討議する授業形態が発展していったものである。討議には、状況についての詳細な説明のみで作成者の考えは組み込まれていない資料（ケース教材）を用いる。参加者はその資料（ケース教材）から情報を整理し、関連付けを行い、問題分析し、複数の解決策を検討する。そして、その中から意思決定を行っていく。討議の中で重要なのは解答や結論自体ではなく、どのような経緯でそのような結論に達したのかを発言する表現力であり、参加者の発言には個人的な経験・価値観・人間性が反映され、それを聞いている人には、洞察力・分析力等が生まれてくる。そして、参加者は協同的な態度で討議全体を建設的で深みのあるものにしようという共同認識を持って参加するのである。

ケースメソッド教育で鍛えられるビジネス能力は大きく2つの要因で表すことができる。（資料1）



（資料1「実践！日本型ケースメソッド教育」より）

横軸の要因は、ビジネスを行なう上で欠かせない専門知識であり、縦軸の要因は、洞察力・統合力・概念形成力・戦略力・意思決定力など幅広いビジネス能力が含まれ、知識とは異なる性格を持っている。専門知識は勉強すれば誰でもほぼ同じように習得できるのだが実践力はその機会がなければ個人差も大きくなり、誰もが同じだけ持てるわけではない。そこでケース教材をとおり、擬似的な修羅場体験の機

会を創造することで実践力を向上させるのがケースメソッド教育である。（高木晴男・竹内伸一(2006)「実践！日本型ケースメソッド教育」より参照、資料1の図は抜粋）

このような考えに共感し、ケースメソッド教育を実践してきた。

5. 実践！ケースメソッド教育

（1）ケースリーダー（教師）の役割

ケースメソッド教育におけるケースリーダー（教師）の役割は、通常の授業での教師の役割とは違い、理論の解説や知識を授けるといった教授方法は行わない。また、生徒を指名し、意見を述べさせるということも行わない。あくまでも、生徒が自分自身の意思で挙手し意見を述べなければならない。そのためケースリーダーとして、何を議論の対象とするのか、また、どのような回答が予測されるのかを考え予習を行う必要性をケースメソッドの授業を受講し実感した。そして実践後、ケースリーダーとして特に感じたことは下記のことである。

- ・ケース教材を読み、自分自身の考えをまとめることは生徒にとって難しい。そのため、ケース教材を調べるための道具が必要。
- ・ケース教材は短いほうが集中力のみならずモチベーションが持続する。また、文が長すぎる場合、読解力が必要である。長い文章の場合は、補足としてビデオなどの視聴覚教材を利用したほうがより理解力が増す。
- ・通常の授業と違い教員自身の考えを言わずに生徒の意見で話を展開しなければならず、やはり十分な予習が必要。
- ・こんな事を考えて欲しいと思ったことを生徒自身に考えさせるために発する言葉をこの授業実施後、意識的に発することができるようになった。

（2）ケース教材

高校生を対象にしたケース教材は非常に少ないため、私自身でケース教材を開発することにした。教材としてどのようなものが適切であるか、生きる力を育むために必要なこととは何かを考えた結果、近年の社会問題や卒業生（就職・進学した生徒両方）からの情報を元にしたケース教材の開発が適切なのではないかと考えた。特に卒業生からの情報は貴重である。なぜなら、実際の大学や会社を知っている彼らの情報は今後生徒に起き得る問題となる可能性が非常に高いと考えたからだ。

また、1年目の生徒アンケートの結果から2年目には財務諸表分析に関するケース教材を開発し、実践力の向上を図ることにした。この2年間でケース教材は全部で5ケース完成した。それは主にインタビュー調査から得た情報をまとめたものである。ディスカッションを成功させるためにケース教材は重要な鍵となる。生徒自身にこのケースから何を学んで欲しいのかという『学び』を考えた上でケースの構成を考えるとよりディスカッションが盛り上がるのが実践を通じてわかった。

※ケース教材に興味がある方は、下記のサイトをご覧ください。
私が開発したケース教材は載っていませんが、高校生で使えそうなものもいくつかあります。

慶應ビジネススクール：<http://www.bookpark.ne.jp/kbs/>

(3) 授業構成

商業高校の生徒に合う形の実践方法を考え授業を組み立てた。大学で実施しているケースメソッド授業と異なる点は、授業時間を利用して事前学習をすること・視聴覚教材の利用・フィールドワークの実施等である。本校でのケースメソッド教育の実践方法は主として次のとおりである。

次	学習内容	授業内容
1	ケース教材事前学習 (1/2時間)	ケース教材を配布し事前学習を各自が行う。※質問プリントも同時に配布。インターネット等を利用し、調べ学習を行う。
	※視聴覚教材の利用 (1時間)	ケースについてのビデオを見る。
	※フィールドワークの実施(2時間)	ケースについてのフィールドワークを行なう。
2	グループ ディスカッション (1時間)	質問プリントをもとに各班の班長が主体となってディスカッションを行う。その後、班長はディスカッションのまとめを発表する。
3	クラス ディスカッション (1時間)	何が問題なのかを考えながら話を展開し、解決方法を考える。※発言者は挙手し、いつ挙手してもよい。
4	まとめ・感想 (1/2時間)	前回の意見をまとめる。生徒はケースメソッド授業後の感想をレポートとして提出。授業を振り返る。

視聴覚教材やフィールドワークは実施する場合としない場合がある。

(4) 実施後の感想(主なもの)※生徒の感想文より抜粋

- ・自分から発言する難しさと大切さを知った。
- ・一つの視点から物事を考えるのではなく多くの視

点から物事を考えられるようになった。

- ・自分の意見を他人にわかりやすく伝えるためには他の人の話もよく理解した上で話さなければならなかったと思った。
- ・思わぬ意見の発見で私の考えもかなり揺れ動き、流されやすいのだろうかと考えた。よく考えることが大切だと思った。

6. 授業実施後の考察と今後の課題

ケースメソッド授業を始める前、生徒たち自身が必要だと感じていたことは、コミュニケーション能力、勇気、一歩踏み出す力、自分自身の考えを人前で発言する力、日本語力などであった。ケースメソッド授業を行なうことで、主人公の視点や周囲の人の視点、それぞれの視点で物事を考えることができるようになってきた。さらに、フィールドワークを利用することでケース教材を身近に感じ、ディスカッションが深みのあるものとなった。また、自分自身の考えを人前で発言するということは大変勇気のいることである。授業を通し、最初の頃は恥ずかしくなかな手あげることができなかった生徒も回を重ねるごとに自分自身の考えを発言することができるようになってきた。そして、この授業において一番成長したと感じたのは、4月から就職する生徒たちである。3年目の今年も就職を控えた生徒のモチベーションは進学する生徒に比べ高いと言える。それは、授業の回を重ねるたびに、自分自身を変えたい、社会に出ても困らないようにしたいという思いがひしひしと伝わってきた。

総合実践の授業でケースメソッド教育を実践してきたが、ケースメソッド教育は商業の様々な科目で実践が可能である。例えば課題研究の授業では、研究対象の理解をより深めるために実践することができる。また、財務諸表分析を取り扱ったケース教材は会計の授業で実践することができる。ディスカッションを通し、より応用力・実践力を身につけることができるだろう。

商業高校におけるケースメソッド教育は始まったばかりである。商業高校にしかできないケースメソッド教育を今後も模索していきたいと考えている。

<参考文献>

高木晴男・竹内伸一

「実践！日本型ケースメソッド教育」ダイヤモンド社